**「スワーミー・ブラフマーナンダ」**

**2023年2月19日**

**逗子例会　午後**

**スワーミー・メーダサーナンダによる講話**

**於・逗子協会**

スワーミー・ブラフマーナンダは多くの場合、信者たちに平凡で世俗的なことについて話をし、霊的な説教をすることはほとんどありませんでした。その理由は、本当に喉が渇いたときだけ水をおいしく飲めるが、喉が渇いていなければ水を飲むことさえできない、ということが霊的な指導にも言えるからです。真理を真剣に知りたいと思うようにならない限り、霊的な指示を与えられても何の役にも立ちません。霊的な話を聞く人はたくさんいますが、実際に霊的な実践を行うためにそれらをまじめに聞いているわけではありません。ですから、ブラフマーナンダジー（以降マハーラージ）は、真剣な求道者だけに霊的生活について話したかったのです。これがマハーラージの取り組み方でした。つまり、馬の耳に念仏、言っても分からない人には言いませんでした。

それだけではありません、マハーラージは楽しいことも好きでした。彼は冗談をよく言いましたし、兄弟弟子や信者をからかうのが大好きでした。そして趣味は魚釣りとトランプでした。これは一般的な僧侶のマナーに反しています。信者たちはときどき、「ラーマクリシュナ僧団の長であるほどのお方が、どうしてそんなことをなさるのだろうか？」と混乱しました。マハーラージがそのようなことをなさった目的は何でしょう？　本来、霊的な人は、霊的なことを話したり、ジャパや瞑想などをする。これが聖者や偉大な僧侶に対する一般的なイメージです。答えは、彼の心は常に非常に高い次元に上がっていた、ということです。シュリー・ラーマクリシュナほどではありませんが、これが彼の心の状態でした。コンパスが常に北を指しているのと同じように、彼の通常の意識レベルは神にありました。もし彼が常に神の意識の中にいるとしたら、どうやって他の人に教えることができますか？　そうです、彼は心を神の次元から強制的に降ろすために、ありふれたことを話しました。そうして人々をマーヤーの手中から解放するための教えを与えることができたのです。すなわち、トランプをしたり、魚を捕まえたり、冗談を言ったり、他の人をからかったりすること-これらすべての目的は、心を神の意識からより低い次元に降ろし、他の人に霊的生活についての指示を与え、彼らを平安と悟りの道に導くためでした。実例を挙げましょう：

かつて、ベンガルのミドナポール地区の副治安判事がマハーラージのことを聞いて、霊的生活についての指導を求めたい、そして可能であればイニシエーションを受けたいと思って、ベルル・マトにやって来ました。ベルル・マトの入り口近くには池がありました。この人がマトに入ると、池で魚を捕まえている僧侶を見つけました。彼は少し奇妙に感じました。しかし彼は本堂に行き、僧侶(スワーミー・プレーマーナンダ)にマハーラージについて尋ねました。プレーマーナンダジーはその時マハーラージが魚を捕まえていることを知っていましたが、これを紳士に明かしたくなかったので、何も言いませんでした。ある予感がしたので紳士は「私はベルル・マトの入口で池で魚を捕まえている一人の僧侶を見ました、彼がスワーミー・ブラフマーナンダジーでしょうか？」と尋ねたので、プレーマーナンダジーは、はい、そうです、と答えました。その人はかなりショックを受け、「私は魚を捕るような僧侶からイニシエーションを受けるつもりはありません！」とはっきり言いました。

しばらくしてマハーラージがご自分の部屋に戻ると、プレーマーナンダジーはやや不満げな口調でその出来事を語りました。マハーラージは穏やかに「バブラム(スワーミー・プレマーナンダの僧侶になる前の名前)・ダー、心配しないでください。タクールの恩寵で、そのような将校は大勢この僧団に来るでしょう」。

1週間後、同じ将校が戻ってきてプレーマーナンダジーと面会し「サー、どうかスワーミー・ブラフマーナンダジーに会えるように取り計らってください」と頼みました。プレーマーナンダジーは驚いて「前回お見えになった時、あなたは怒って、魚を捕まえるのが大好きなスワーミーからはイニシエーションを受け取らないと言ってお帰りになりました。それなのに、なぜ、今はブラフマーナンダジーに会いたいのですか？」と尋ねました。 その将校は「あの日、ベルル・マトを出てから、私はスワーミー・ブラフマーナンダジーの顔を一瞬たりとも忘れることができなくなったのです。それで心が落ち着かなくなり仕事も手につきません」と打ち明けました。

そこでプレーマーナンダジーはマハーラージと会えるように手配し、後にその将校はマハーラージからイニシエーションを受けました。そしてその将校はグル・ダクシナ（グルへの捧げもの）としてマハーラージに高価な釣り竿を1本プレゼントしました！　その釣り竿は、ベルル・マトのマハーラージの寺院の二階の寝室に今も保存されています。

もう一つの例：マハーラージは、シュリー・ラーマクリシュナの最も近しい在家信者の一人であるバララーム・ボシュの家（バララム・マンディール）に滞在していました。マハーラージはそこに滞在するのが大好きでした。彼のための特別な部屋が用意されていて、そこは大金持ちの部屋のように調度品が整えられていました。ある時、ある著名人がマハーラージに会いに来ました。彼はマハーラージがその部屋で昼寝をしているのを見ました。彼は気づかれずに部屋に入ったのですが、シュリー・ラーマクリシュナの霊的な息子たるもの、放棄の精神で非常に厳しい環境で生活していると予想していたので、その真逆な姿を見て、かなりがっかりしました。しかし、その男性は自分の内なる思いをさらけ出すことはせず、部屋の外でマハーラージとの会合を待ちました。しばらくすると、彼はマハーラージに会うことを許されました。マハーラージとの話が終わり、帰る時に、彼は言いました「私は人生で最大の過ちを犯すところでした。スワーミー・ブラフマーナンダジーとお話をして、私の人生の最大の問題は解決したのです。高価な家具に囲まれているのを見て、最初はマハーラージのことを誤解しました。もしあの時、この場所を去っていたら、私はこの素晴らしい機会を逃したでしょう」。

これらの話は、マハーラージを外から見るだけでは簡単に誤解する、ということを示すために与えられたものです。

さて、マハーラージの霊的偉大さについて話します。ベルル・マトには評議員会がありました。(評議員会はラーマクリシュナ僧団を管理運営する人々です)。彼は僧団長だったので、それらの会議に出席するよう求められていました。彼は出席を求められては拒否したので、会議は何度も延期せざるを得ませんでした。スワーミー・サーラダーナンダが書記長で、スッダーナンダジーが書記補佐でした。彼らは何度もマハーラージに会議に出てください、と繰り返しお願いしましたが、何度も断られました。

マハーラージは僧団長だったので、彼の署名が要る重要な書類もありました。そんな時はサーラダーナンダジーかスッダーナンダジーが書類にサインをしてください、とお願いしました。書類にサインをすることはさほど難しい仕事ではありませんね。それなのにブラフマーナンダジーは理由を付けては先延ばしにしようとしました。そんなある日、彼らは「マハーラージ、今日こそ署名をしてくださらなければなりませんよ」と言いました。マハーラージはとりあえずペンを取り、署名しようとしましたが、「自分の名前のつづりを思い出せない。別の日に書類を持ってきてください」と言いました。

そこで彼らは、会議を何度も延期したり、サインを断る理由を尋ねました。「どうしてなのですか？」　と言うと、マハーラージは「ねえ、私には世界は影のように見えるのだよ。それは本当のことのように感じない。だから、あなたたちが私に持ってくるどれにも注意を向けることができないのです。なぜなら、それらに心を置くことができないから」。　このことから、彼がどれほど高い心の境地にいたかをよく理解することができます！

『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』に、誰かに触れるだけでその人の中の霊的意識を目覚めさせることができる、と書かれています。そして時々、触れなくても、「この人の霊的な意識を目覚めさせてください」と願うだけで、同じ結果が得られることがあります。マハーラージもこれを行うことができました。その例を言います。当時、マハーラージはブバネシュワルに滞在していました。穏やかで静かな青年が僧団を訪れ、図書館で本を読んでいました。ある時、マハーラージが自分の部屋から出てきて、この青年を呼び、向かい合って座るように言いました。青年が座るとマハーラージは青年に触れました。マハーラージが青年に触れた途端に青年は深いサマーディに入りました。それから青年は通常の意識に降りた後、ブバネシュワルの僧団を去り、二度と戻ってきませんでした。誰も彼に何が起こったのか分かりませんでした。この例は、いかにして、ある人の霊的意識が突然目覚めるか、ということを示しています。ですから、時には自己努力や事前の準備なしでも、高度に進化した魂の純粋な恩寵によって潜在的な霊力が引き上げられる、という例があるのです。マハーラージのような人物は、誰の霊的意識が開花する準備ができているかを見て理解することができたので、それに応じて行動なさいました。

マハーラージの直弟子スワーミー・ヴィジャヤーナンダが書いた『スワーミー・ブラフマーナンダの回顧録』があります。ヴィジャヤーナンダジーはアルゼンチンのヴェーダーンタ協会の創設者で、長年アルゼンチンで暮らしました。彼は超能力の現象について説明しました。私たちは皆、超能力についてきたことがありますが、それはどのように起こるのでしょう？ヴィジャヤーナンダジーは、小宇宙をコントロールすることができれば、大宇宙もコントロールできるようになる、と言いました。自分の心をコントロールできれば、他者の心もコントロールできます。なぜなら、それはすべての中に存在する同じ存在だからです。それが超能力の説明です。ミクロレベルで人間の中に存在するのと同じプラクリティが、マクロレベルで世界のすべてに存在します。一つの『アトム(※化学的に有意義な最小単位)』を構成するものが、宇宙全体を構成しています、つまり宇宙全体が同じ『アトム』で作られているのです。

私たちは一般的に、自然にコントロールされていますが、心をコントロールすれば、自然はその人に従います。これが超能力の説明です。さて、悟った人が超能力を持てるだけでなく、霊的生活において十分に進歩した人もこれらの力を持つことができます。しかし、本当のところ、神を悟る前に超能力を使用することは安全ではありません。なぜならそれは自分のエゴを強めるので霊性の発達の障害になるからです。しかし、人が神の悟りに達した後、エゴは「宇宙的私」に解消されるので、これらの超能力は他者の福祉のために使えます。

マハーラージのもう一人の兄弟弟子スワーミー・ヴィッギャーナーナンダは、僧侶になる前はエンジニアでした。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの指導とアイデアの下で、ベルル・マトのシュリー・ラーマクリシュナの大きな本堂を設計したのは彼です。そして、スワーミージーが肉体を去ってからずっと後、現在のベルル・マトの本堂は、マーティン・アンド・バーン社によって、ヴィッギャーナーナンダジーの監督の下で建設されました。彼は科学の人だったので、心の態度は合理的でした。それと同時に、霊的にも偉大なる高みへと上がりました。

ある日、ヴィッギャーナーナンダジーとマハーラージの間で超能力についての議論が始まりました。マハーラージは超能力が存在することを繰り返し強調しましたが、ヴィッギャーナーナンダジーは強くこう言いました「いいえ、私は信じません。そんなことが本当のわけがありませんから」。

マハーラージ「その証拠が欲しいかい？」

ヴィッギャーナ－ナンダジー「はい、欲しいですとも」

マハーラージ「オーケー、では賭けをしよう」

それから、二人はかなりのお金を賭けました。快晴でとても暑い日でした。マハーラージは、「今日の午後1時に雨が降る」と言いました。ヴィッギャーナーナンダジーは、「こんなに晴れて小さな雲一つないのに雨などふるものですか。そんなことあり得ません」と言いました。

その頃、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの寺院が建設中だったので、石灰を運ぶボートがガンジス川に停泊していました。マハーラージは見習い僧に、その船をビニールシートで覆うように言いました。不思議なことに、午後1時の10分前に、どこからともなく巨大な雲が集まり、暗くなってきました。そしてちょうど午後1時に雨が降り始めたのです。ヴィッギャーナーナンダジーは自分の部屋から出てきて、雨を見て、また自分の部屋に戻りました。明らかにヴィッギャーナーナンダジーは賭けに負けたので、マハーラージは「掛け金をよこしたまえ」、と言いました。ヴィッギャーナーナンダジーは「マハーラージ、私がお金を持っていないことはご存じですね。どうかお金を下さい。それであなたにお払いします」と言いました。

この出来事の理解すべき重要な点は、自分の体と心をコントロールできれば、マクロレベルで自然をコントロールできるということです。

別の話をします。一般的に、当時、良い家庭の女性は演劇に参加しませんでした。当初、男性が女性役を演じていましたが、それは不自然だったのでシュリー・ラーマクリシュナのもう一人の著名な在家弟子ギリッシュ・チャンドラ・ゴーシュは、女性に演じさせることを考えました。しかし、良家のお嬢さんは演技をしなかったので、売春婦が女優として採用されました。今日の午前のセッションにも出てきたタラスンダリはそのような女優の一人でした。彼女は本当に非常に才能のある女優でした。当時、彼女は途轍もない精神的苦痛に苦しんでいました。

昼食前のセッションですでに語られたように、ある日、タラスンダリはマハーラージに会いに来ました。お付きの見習い僧は最初、彼女がマハーラージに会う許可を出すことを躊躇しました。しかし、彼女が「どうしても会わせてください」と言い張ったので、見習い僧はマハーラージにそのことを知らせに行きました。マハーラージは見習い僧に「彼女をすぐ前に連れてきたまえ」と言いました。当然、見習い僧は驚きましたが、とにかく彼女をマハーラージの居間に呼びました。タラはやって来ると、マハーラージの足元に倒れて涙を流し始めました。そしてマハーラージに言いました「お父さん、どうか私をお救いください！あなたは私のハートで何が起こっているかご存じのはずです。私には平安がありません」。するとマハーラージは、「我が娘よ、あなたは私を『父』と呼んだのだから、自分のことをスワーミー・ブラフマーナンダの娘と呼べばいいのだよ」と言いました。分かりますか、マハーラージはタラの気持ちをどのようにまったく別の方向に変えたか。マハーラージはまた、彼女に安らぎを与え、心を楽にすることをたくさん話しました。そして見習い僧に彼らのために食べ物を持ってくるように言いました。

しばらくして、タラはブバネシュワルに行き、そこに家を建てて霊的実践をしました。その後、マハーラージが亡くなったとき、彼女がやって来ました。マハーラージとの最初の会合で出会った見習い僧は、その頃には僧侶(スワーミー・ヴィジャヤーナンダ)となっていました。タラは彼に「私の愛する兄弟、私たちのお父様はもう肉体がありませんが、彼はいつだって私たちの心におられます」と言いました。その頃までに、彼女の人生は完全な変化を遂げていました。ラージャ・マハーラージの一言「スワーミー・ブラフマーナンダの娘と名乗れるように生きなさい」だけで、彼女の人生観は変わり、信者になったのです。マハーラージのような聖者には、それを行う力がありました。

これらすべてのエピソードは、スワーミー・ブラフマーナンダの偉大な霊性の高さと、人の霊性を変容させる彼の途方もない力を示しています。だから彼は「シュリー・ラーマクリシュナの霊性の息子」と呼ばれるのにふさわしいのです。